

INTERVIEW 参加者の感想

実際見て・聞いた貴重な機会だった



岩手県立
盛岡農業高等学校
生徒

えんどう たくみ
遠藤 巧夢 さん

学校では学べないこともたくさんありました。他校の生徒と交流し、飼っている動物や取り組みなども聞け、楽しかったし、勉強にもなりました。共進会の見学では、岩手と違って体が大きくきれいな牛が多く、他県の牛を見ることができるといい機会でした。

実家でも和牛繁殖をやっているのですが、将来は今よりも増頭できるようにがんばりたいし、同時に削蹄師も目指したいと思っています。

仕事に対する価値観などを参考にしたい



埼玉県立
熊谷農業高等学校
生徒

たかだ あかね
高田 茜 さん

遠出で大変かなと思ったけど、初日の交流会から他校の生徒がみんな優しく、また、色々な意見が聞けて畜産に魅力を感じました。

シンポジウムでは、講演会での鎌田さんの仕事観や、パネルディスカッションでのパネラーの多様な意見・物事の見方などが参考になりました。

将来は、飼育員など生き物に関わる仕事に携わりたいと考えています。

生徒たちのやる気の高まりを感じた



岐阜県立
飛騨高山高等学校
教諭

あんどう しんすけ
安藤 慎介 さん

同じ夢を持った高校生が集まるので、生徒たちのモチベーションが高まったように感じます。共進会では他県の牛を見る機会が無いので、管理の仕方や宮崎県の牛の特徴などを生徒たちも、直接見て学ぶことができたと思います。

帰ってからも連絡を取り合うようなので、生徒ひとり一人の見識や、畜産高校生全体のネットワークが広がる意義のあるサミットだと思います。



和牛の未来を担う者たちへ

10月2～4日、第1回全国和牛ハイスクールサミットが開催されました。仲間づくりや地域の畜産の特徴・魅力を再発見し、今後の人生の選択に役立ててもらおうことが目的で、全国から高校生約350人が参加。多くの高校生が畜産について夢を語り合いました。今回の特集では、サミットの様子と市内で畜産に携わる次代の担い手の特集します。

関係者が協力して運営

今年5月に、小林秀峰高校や農業関係団体などで組織する実行委員会を設立。当日まで準備を進めてきました。

名刺交換などで交流図る

サミットのオープニングとして、宮崎県畜産振興課の谷之木精悟課長が講演。「宮崎県の取組紹介」として口蹄疫からの復興や、全国和牛能力共進会への歩みなどについて講話がありました。

会場を移しての交流会は、小林秀峰高校の生徒が中心となって企画・運営。高校生同士の名刺交換や和牛に関する事例発表をとおして、交流を深めました。

さまざまな視点から発言

2日目は、県の共進会を見学しました。県内各支部を突破した和牛のレベルの高さを間近で体感。出場した農家さんと話をする高校生の姿も見られました。

多くを学んだ3日間

3日目は、選択研修として5つのコースに分かれ、和牛の管理方法や最新の研究などについて学びました。その後、お別れセレモニーが行われ、全国から集まった高校生たちは別れを惜しみつつ、再会を約束して帰路につきました。

また、文化会館で行われたシンポジウムでは、基調講演として鎌田秀利さんが登壇。鎌田さんは農業が持つ多面性と、将来の畜産農家の在り方を高校生たちに訴えていました。その後のパネルディスカッションでは、これからの和牛について、それぞれ自分の経験談や思いを、夢やキャリアデザインとして高校生に伝えました。(次ページ参照)



パネラー

Photo 1 小林秀峰高校 蔵内勇人さん。農業科で和牛の生産技術や飼養管理について学習中。2 但馬牛生産農家 田中かずまさん。兵庫県の和牛「但馬牛」の繁殖農家のほか、削蹄師としての顔も持つ。3 串間市の畜産農家 鎌田秀利さん。第10回、第11回全国和牛能力共進会に出品し、総合評価群で優等賞主席、第10回では内閣総理大臣賞を獲得。4 JA 宮崎経済連肉用牛課長 押川雄三さん。平成7年に JA 宮崎経済連に入会。平成23年には、経済連初の海外事務所設立に携わる。5 しばやし農業協同組合和牛生産課 米倉桃子さん。兵庫県出身。平成28年に宮崎県立農業大学校を卒業後、同年入組。

今の立ち位置から想像できることは限りがあるが、一歩前に踏み出していくと全然違う場所が見えてくる。不安があるのはみんな一緒なので、思い切りやってほしい。

やってみると面白いことが見つかってくる。きつかけはなんでもいい。色々考えるより、まずやってみることが大事。

押川さん「外に飛び出して、見識を広げてほしい」

畜産は経営と技術が両輪で回らないとなかなか計画どおりにいかない。計画を立てる際に慎重さは重要。色んな方面から計画を検証する必要がある。

和牛は昔に比べて高級な食べ物になった。誰に食べてもらうのか、食べていただく場面をどうつくるのか、そこをしっかりと判断していかなければいけない。

最近よく思うのは、高校時代に戻って勉強したいというところ。すごく後悔をし

ている。今は情報が動いている時代。色々なことをどんどん吸収して欲しい。

外に飛び出して見識を広げてみるのもいい。色々なことを吸収できる環境をつくるのが大切。

米倉さん「人との出会いを自分の糧に」

農業大学校時代に、西諸出身の同級生2人と一緒に牛の世話や競り市の手伝いに行き、小林の人たちの人柄に惹かれた。

体力では男性にかなわないが、負けず嫌いなので弱音は吐きたくなかった。牛との接し方を女性ならではの視点で工夫している。

育種改良が進んで種牛自体が大きくなり、分娩事故が多くなっている。分娩事故の少ない丈夫な牛をつくりたい。

親元を離れて宮崎に来た時に、周囲にたくさん助けを求めている人が多かった。これからの色々な人に出会いたいと思うが、人との出会い

を糧にして、自分の夢を実現してほしい。

蔵内さん「仲間たちに負けなように、頑張る」

小さい頃から両親が牛を育てている姿を見て育ったが、後ろ姿がキラキラしていた。自分もあんな大人になりたいと思ったことが、畜産農家になりたいと思っただけ。

牛の血が濃くなったことが、分娩事故や子牛の身体が弱くなったりにすることに影響していると思う。もつと他県や外国から良い牛を取り入れて、できるだけ血の近いもの同士を交配させないことも大事ではないか。

今回、自分と同じように畜産農家になりたい、畜産関係の仕事に就きたいと考えている仲間がたくさんいると知ることができた。

仲間たちに負けないように、夢を叶えるために、これからもっと頑張っていきたい。

DISCUSSION サミット パネルディスカッション



テーマ 畜産への夢を育むキャリアデザイン ~一人ひとりの可能性を求めて~

コーディネーター 原田 英男さん

東京都出身。元農林水産省畜産部長。現在は、一般社団法人畜産環境整備機構の副理事長を務める。24歳から3年間、小林市細野の家畜改良センター宮崎牧場で勤務した縁で、現在は「宮崎しばやし熱中小学校」の校長としても活躍中。



畜産に対する想いと高校生へのエール

パネルディスカッションでは、参加者の質問に答える形で、意見交換やエールが送られました。

鎌田さん「自分の好きなことを伸ばしてほしい」

自分にとって牛は宝。牛が繋いだ縁があって、自分はここにいる。

畜産は牛に対するサービスマスターだと思っている。牛の嫌がることはほしくない、牛が喜ぶ環境をつくるということに気を付けている。

いかに健康な子牛を産ま

せるか。繁殖という基本に戻って、繁殖能力の高い母牛群を大事にしてほしい。

まずは行動することから何が始まる。考えているだけでは何も始まらない。

自分の好きなことを一生懸命やる。やっているとうちにどんどんそれが分かるようになって、楽しくなる。仕事も同じようにステップアップしていけばいい。

あまり難しく考えず、自分の好きなことを一生懸命伸ばしてほしい。

田中さん「一歩踏み出すと、全然違う場所が見えてくる」

育てた牛を出荷する時は今でも葛藤がある。ただ、人間は勝手に、自分が育てたお肉はひいき目もあって美味しい。これは豊かなことで、自分のひいき目と深く関わられたということ。そういった想いを食べてもらう人に少しでも感じてもらいたいと思いついてSNSで発信している。



獣医師
(宮崎県農業共済組合)

なかま よしき
中間 由規さん
(32歳)

実家が畜産農家で、幼い頃から畜舎を出入りしてた獣医師は、自分にとって身近な存在でした。また、体を動かすことや自然の環境が好きだったため、地元での獣医師を志しました。普通科高校から大学の獣医学科に進学・卒業し、現在の職場に就職しました。

仕事内容は、主に牛の病気の治療（投薬や手術）や往診で各農家を回るほか、受精卵の採卵や繁殖検査を行っています。また、他の獣医師と交代で、24時間体制で緊急の呼び出しにも備えています。体力勝負の面



辛い現場もあるため、動物が好きだけでは務まらない

動物だけでなく、農家さんの気持ちも考えながら仕事をしています

繁殖農家は子牛を産み育てることが仕事です。母牛の妊娠から出産、生まれた子牛を出荷するまで約9か月。とにかく牛の体調や成長具合に配慮しながら世話をし、その合間合間で飼料作物の管理などを行います。母牛の発情の兆候を見逃さないよう気を配るなど、大変なこともあります。

評会やセリ市などで自分の育てた子牛が高い評価を受けると努力が報われます。今後は、共進会でもさらに上を目指すと同時に、地区内の高齢となった農家さんのサポートも行い、良い牛を1頭でも多く残せるよう活動していきます。



県共進会で優等賞2席を獲得した「くここ」と黒木さん



畜産農家
(和牛繁殖農家)

くろき ゆういちろう
黒木 祐一郎さん
(34歳)

高齢となった農家さんのサポートなど地区内の牛を守る活動もしていきたい

普通科高校を卒業後、建設会社に勤めながら、実家の畜産業も手伝っていました。両親も高齢になったことから、28歳で畜産業に専念することを決めました。

和牛はいろいろな業種の人たちが、それぞれの方法で支えています。その中で次の世代を担う、4人の担い手の仕事内容や思いなどを紹介します。

和牛の次代を担う



技術員 (技師)
(こばやし農業協同組合)

おりた ななみ
折田 菜々美さん
(18歳)

実家は畜産農家ではありませんでしたが、幼い頃から生き物に興味があり秀峰高校農業科に進学し、牛の飼育活動を通して和牛の魅力に惹かれていきました。また、飼育活動の中で多くの農家さんに支援していただき「恩返しがしたい」と思うようになりました。高校2年生で全国和牛能力共進会に出場した時に、技術員の仕事を知り、自分も技術員になることを決意。高校卒業後、現在の職場に入組しました。

技術員の仕事は、子牛の生産検査や登録検査、巡回して頑張ります。今後はもっと勉強し、農家さんから安心して相談されるような、技術員を目指して頑張ります。



現在の仕事を知るきっかけとなった全国和牛能力共進会 (写真左)

農家さんとの世間話一つひとつが、勉強になることばかりです

家畜人工授精師は発情のきた雌牛に、種牛から採取した冷凍保管されていた精液を専用の器具で注入し、人工的に授精させるのが仕事です。農家さんから連絡があつて出向くことが多いので、仕事のスケジュール管理が大変で、特に気を使います。ただ、この仕事を通して出

会う人も多く、その繋がりは大切にしていきたいと感じています。この業種は個人営業の人も多いですが、今後は同業者間の連携も深めていきながら、農家さんが1頭でも多くの優秀な牛を繁殖できるように、お手伝いしていきたいです。



同業者間での連携を深めながら、畜産業界を支えていきたい



家畜人工授精師
(齊藤家畜人工授精所)

さいとう のりゆき
齊藤 憲之さん
(38歳)

SMILE サミットで出会った笑顔



地元の畜産を誇り未来へ

畜産業は、多くの人たちで支えられています。高齢化などで担い手が不足しているのが現状です。しかし、今回取材した4人(6・7ページ)のように、畜産に対して愛情と情熱を持って仕事に取り組む若者も少なくありません。

今回開催した、全国和牛ハイスクールサミットでは、参加した高校生たちが交流を深め、語り合いながら将来の夢を描きました。そして、その高校生の夢が実現できる畜産業を残すために、関係者は日々努力を積み重ねています。

こうした人の思いで地元の誇れる畜産が、次の世代に引き継がれていきます。

INTERVIEW 専門家の話

畜産の歩みとこれから

はじめに
今回、小林市を会場に県畜産共進会と全国和牛ハイスクールサミットが盛会に開催され、地元の皆様のご協力に、まずはお礼を申し上げます。今回のハイスクールサミットは、宮原市長の担い手育成に向けた強い情熱で実現し、全国から多くの高校生が小林

に集い、和牛の仲間づくり、絆を深める大変実り多い大会となりました。企画運営に携わられた多くの皆様に感謝を申し上げます。
これまでの宮崎県の畜産(和牛)の歩み
本県の畜産を振り返ると、昭和35年の産出額は43億円で全国26位。決して畜産主産県ではなかった当時「台風銀座」ともよばれた本県で、気象災害に強い防災営農の柱として畜産が振興され、宮崎を代表する主要産業へと飛躍的な発展を遂げました。

以降、平成の時代を通して、畜産産出額は全国3位の地位を持続し、直近(平成29年)では、2千260億円と過去最高を記録するなど、全国有数の畜産県に成長してきました。
この流れの中で、和牛についても、全国2位の頭数を誇る肉用牛繁殖県として確固たる地位を確立してきました。これは長年にわたる改良と生産者の匠の技で培われた

成果であり、全国和牛能力共進会で3大会連続となる内閣総理大臣賞の受賞や世界に誇る「宮崎牛」の飛躍は、これまでの先人たちのたゆまぬ努力で築きあげられたものであり、我々は、これを後世に引き継いでいく責務があります。
今後、宮崎県の畜産(和牛)が目指す方向
これまでの本県畜産の道は決して平たんなものではなく、産地間競争や国際競争への対応、口蹄疫等の家畜伝染病発生など、様々な試練に直面してきましたが、県民の皆様様の御理解のもと、関係者一体となった宮崎の産地力で乗り越えてきました。
令和に入り、これから本格的な人口減少時代を迎え、担い手の確保をはじめ、国内の経済・消費構造の変化、そして、今後一層進展する国際化にどう対応していくか、変化の時代を生き抜く産地力が試されます。
和牛においても、多様な人

材を生かし、引き続き儲かる経営を実現するためには、産地構造をより強固なものへと変革させ、世界を見据えた攻めの産地づくりを進めていく必要があります。
次世代の畜産を担う若い皆さんへ
今回、ハイスクールサミットに参加された高校生の姿をみて、将来の畜産に大きな希望と頼もしさを感じました。畜産は夢のある産業です。志を持って儲かる経営に果敢にチャレンジして欲しいと思います。そのためには、固定概念、既成概念を振り払い、新しい発想への転換が必要であり、何より家族や仲間を大切に、地域を愛し、絆が育む幅広い視野を身につけて欲しいと思います。
若い皆さんの夢の実現が、これからの宮崎の畜産を大きく動かすムーブメントになると大変期待しており、その実現に向け我々行政としても全力で支援していきたいと考えています。



宮崎県 農政水産部 部長 坊菌 正恒
●プロフィール
小林市出身、昭和58年宮崎県入庁。畜産課、畜産試験場、農林振興局等で勤務後、畜産振興課長、畜産新生推進局長、農政水産部次長を経て本年4月から現職

畜産(和牛)が目指す方向
畜産(和牛)の歩み
次世代の畜産を担う若い皆さんへ